

審査論文の要旨

本論文は、近代文学において特異な言語感覚で知られる作家、尾崎翠^{おさきみどり}（1896～1971）について、初期の1931～32年に発表された主要4作品の分析を通してその特異性の本質を究明しようとする意欲的な論文であり、序章以下全六章の論考編と未発見資料の紹介などの資料編二章から成る。

論考編序章ではまず尾崎翠の作家活動とこれまでの評価、研究成果を確認する。そして従来は作品の「詩精神」が中心的に論じられてきたことを顧みて、その「詩精神」とともに描かれてきた「病理」に新たに着目して探求を行うことによって、尾崎翠作品の全体像を明らかにすることを目指すことを述べる。

第一章では『第七官界彷徨』を論じる。「第七官」という、これまで尾崎の造語とされてきた語は明治末期から昭和初期（以下、当時とする）の詳細な調査によって、骨相学の文脈で用いられた用例をはじめ、数多くの文献に見出された。その中で尾崎が用いたのは橋本五作『岡田式静坐の力』で提唱された、「自分の『内なる刺戟を知る』官能」の意味のものと推測される。

さらに「第七官（感）」という語の当時の用例の変遷をたどると、近代科学が制度として確立していくなかで「科学」ではないとされていくものやメタフィジカル宗教への親和性が見られる。後には「官」の表記の用例はほぼ無くなり、「感」の例が多い。非科学的なものを、通俗的娯楽的に「第七感」という語で表現していったと見られる。

こうした「第七官」という語の用いられ方の分析によって、この作品が「よほど遠い過去のこと」として語られることから新たな作品解釈が可能となる。その結果、1931年に発表された『第七官界彷徨』という作品名からは二つの意味が読み取れる。一つは語り手「私」によって回想された、1923年の関東大震災以前の「第七官という官能の世界に浸っていた幸福な世界での営み」そのものであり、もう一つは語り手が「語る現在」の時点で体験している、震災以前の過去との「断絶」に直面してのさまよいである。このような二つの異なる意味を合わせてノスタルジアの心性が「第七官界彷徨」という題に象徴的に表現されたのであろうと結論付ける。

第二章では『歩行』について論じる。冒頭と末尾にほぼ同じ詩が配されることを根拠に「円環構造」とされてきた作品構造を検討して、この作品が円環構造ではなく直線構造として読めることを提示する。「おもかげ」という語が用いられた古典和歌や『伊勢物語』が冒頭・末尾の詩の典拠として考えられることや、「よみ人知らず」と記されていることで古風な雰囲気醸し出され、それが読者の関心を惹く効果があることを指摘した。

自分の元から去った人の「おもかげ」に心をとられるという、喪失感に関わって生起する「悲しみ」や「苦しみ」のために「神経」が疲れている人物が描かれ、その「おもかげ」を一時であっても忘れられる場合が描かれるが、それは「悲しみ」や「苦しみ」ゆえに体験されている事柄を他人に見出して、自身のこととしては考えない状態として体験し

たり、喪失されたものと同様の要素を自身に取り込んだりすることによって、自身の「悲しみ」や「苦しみ」が対症療法的に一時的に感じなくてよい状態となる場合であった。

そして神経が疲れているという状態にある場合に、「詩」がそれを癒す力を持つ可能性も描かれる。この場合に自作ではなくても「詩人」が相手の状況を感じて、その状況に合った「詩」を与えたことに、「詩人」の感受性の鋭さが見られるのである。またこの作品の題である「歩行」とは、作中での「私」の行為であるばかりでなく、「私」が心をとらわれている当人の行っている「各地遍歴の旅」を連想させる言葉でもあった。

第三章では『こほろぎ嬢』について論じる。この作品における「私たち」という語り手は、曖昧な情報に影響されながら、こほろぎ嬢や彼女の飲む粉薬について否定的な解釈を有していること、「桐の花」と「こほろぎ」という表象には北原白秋の歌集『桐の花』と『新古今和歌集』所収歌が影響している可能性を提示する。

こほろぎ嬢は図書館で「恋」の対象であるしやあぶという異国の詩人について調査する。しやあぶとその恋人である女詩人まくろおどの特殊な「どつべるげんげる」（自己二重身）関係、この小説の内包する悲劇的要素、心理学徒幸田当人の異端さ、『伊勢物語』第三十八段の同性同士の恋の贈答、異性愛イデオロギーが持つ排除構造などの複雑な関係性が微妙な均衡を保っている。こほろぎ嬢は神経症のために「頭を打たれる」感覚をもたらず頭痛にさいなまされ、世界から抹殺されることへの恐怖を持ち、世界に対する「基本的信頼」を喪失している不安定な状態にあることを指摘する。

第四章では『地下室アントンの一夜』について論じる。尾崎翠のロシア文学への関心を概観した上で、特にチェーホフに惹かれていたこと、チェーホフは「〈非科学〉的なこと」を好む人物を微笑して受容する人物であると想定されていることを指摘する。またチェーホフ『決闘』とエウレイノフ『心の劇場』が人物造型や、苦悩する九作に最後の場面で憩いをもたらすことに影響した可能性をも提示する。

この作品の三分の二を占める〔九作詩稿〕の部分においては、語り手「僕」（九作）の状態には統合失調症の陽性症状が現れている。しかし、自身の詩への批判に対する反論の力強さは、詩を書いたり読んだりしていても「詩人」と紹介されることのなかった『第七官界彷徨』の小野町子、『歩行』の「私」、『こほろぎ嬢』でのこほろぎ嬢らには見られないものである。また彼女らがふさいでいる時には体験している姿が語られなかった「外の風に吹かれて、とても愉快」という体験も九作には可能であった。このような確信や感覚を持ち得ることは、すこやかさや回復の可能性と繋がっていると結論づける。

最後に、終章ではそこまでの分析をまとめるとともに、これらの作品が発表された後の1934年に発表された随筆『もくれん』において、詩のところが相手に伝わるという「心細やかな」やりとりが描かれ、そこでは健やかな聴覚や肯定的な女性像が回復していることを見られることを指摘する。

資料編では、「一 新たに確認できた尾崎翠自身による作品」と「二 新たに確認できた同時代評および同時代人との関係を示す資料」とを紹介している。